

入選

小さなあの子の小さな親切

山形県 第四中学校 1年 伊藤 夢真

「お姉ちゃん、大丈夫？」

それは、学校からの帰り道のこと。いきなり話しかけられた私は驚きました。4歳くらいの女の子が心配そうに私のことを見上げていたのです。

「大丈夫だよ。ありがとう。」

実はそのとき、部活動が始まり、勉強がどんどん難しくなっていて、私は少し疲れていました。そんな私を気にかけてくれたんだろうと思い、心が温かくなりました。じゃあね、気をつけて帰るんだよ、と手を振ろうとしたとき、女の子が、ちょっとだけお話ししよう、と言ったので、少し話すことにしました。

「お姉ちゃん、何歳？ 何年生？」「13歳だよ。中学1年生。」「好きなことはなに。」

「好きなことか……。お絵描きかな。」「私も好き！」

その女の子も絵を描くことが好きらしく、「どんな絵を描くの？ 色ぬりは好き？」と私たちは会話をはずませました。話しているうちに、その女の子のことがわかってきたような気がしました。

気づいたら、あたりは薄暗くなっていました。

「あ、もうお家帰らなくちゃ。ばいばい、お姉ちゃん。」

「じゃあね。気をつけてね。」

女の子は、すぐそこだからと走って行ってしまいました。元気をもらった私は、女の子の背中を見送ったあと、足早に家に帰りました。

それから何日か過ぎ、部活動が長引いてしまって帰りが遅くなってしまった日のことでした。

「あ、この間のお姉ちゃん。お母さん、あの人だよ。」

「ああ……。この間はこの子が……。」

私は、女の子のお母さんに頭を下げられ、驚いて頭を下げ返しました。実は、その女の子は引っ越してきたばかりだったのだそうです。そこで私と話をし、元気が出たのだと言われてすごくうれしくなりました。私も同じだったから。

「そういえばお姉ちゃん、この間大丈夫だったの。」

「ああ、少し学校が大変で……。でも、あなたと話して元気出たよ。ありがとう。」

「そうだったんだ。じゃあ、もっと元気が出るおまじない、かけてあげる。」

女の子はそう言うと、私の頭をぼんぼんとしたあと、これあげる、とアメをくれました。私は女の子がすごくやさしい子なのだと思い、心がぼかぼか温かくなりました。

「ありがとう。がんばろうね。」「うん。」私たちは手を振り、家に帰りました。つらいことがあったときは、その子のことを思い出しています。そして、元気がない人を見かけたら、アメの代わりに私の笑顔でその人を元気にしたいです。